

湖 近江の國十二郡に繋れる大湖なり、當國を古へ淡海國といひ、今近江國と云も、ともにこの湖あるによつてよべり、江といへるも湖のことにして、池の大なるものなり、すでに廣雅にも、湖は池なりと云るせり、水うみといへるは、海に對して、潮にあらずとの言ばなり、源氏物語、その餘の歌書の類、みな以て鹽ならぬ海ともかけり、淡海といへる訓は、鹽なくて味あはきといふことなり、みづうみの訓は、水のみを湛へて海のごとく大なる池といふ意なり、海はうかむの義にて、船の浮ぶ處なり、うかみのがを中略せるなり、亦ふかみの意もあり、ふとうとは通するなり、凡日本に其國々湖水あるところ多し、然ども當國のごとき大なるはなし、比良、比叡、突兀と西に聳へ、群峨高低として、北の方若狹路に列り、三上山、鏡山東に峙、其餘の峯々、旣崩として、畫屏を圍むのごとく、翠憶を張に似たり、四時の景ひとしからず、朝暮の景方口たり、古人是を西土の岳州洞庭湖に比し、または杭州の西湖になぞらふ、瀟湘八景に比して、詩を賦し、歌を詠するもの多し、○中凡湖勢多より、貝津に至て、南北二十里、東西の廣きところは、九里十里にをよべり、其水ふかきこと、貝津の邊にては、七十尋百尋にも及べり、南にいたり、黒津の邊までは、漸く尺寸を以て數ふ、貢御の瀬、早する年には、渡る者脛をうつに過ず、此湖山谷の瀕るところ、八百八川落來て湖となり、勢多にては、流て關の津鹿飛の急流となり、宇治川となり、伏見にゆき、淀へながれ、木津川、桂川と合し、大坂に至り、川口傳法にいたつて、海に入朝するなり、西土の人も知れるにや、海東諸國記に、近江州湖ながさ三十里、廣さ十八里と記せり、一湖なれども、北にては、足利のうみといふ、高島郡にての稱なれば、詠歌みな高しま郡の條下に云るす、詩人呼て、一名を琵琶湖といふ、其象似たるを以てなり、○中歌仙多詠じて、丹穗の湖と云、言意は、一説には、鴈に湖と云といへり、

〔伊勢參宮名所圖會附錄〕湖水 あふみとは元淡海なりしを、天智帝大宮に近き江なりとて、近江